

第37号
Vol.13-1
2016年5月1日

Dari Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

国内事務局 〒859-1215 長崎県雲仙市瑞穂町古部甲 1572 番地 社会福祉法人 南高愛隣会内
TEL: 0957-77-3600 FAX: 0957-77-3966 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 204, 2nd floor, Methodist Apartment, No. 17, Hose Lane, 96000 Sibu, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 Tel.Fax: +60-84-31-0757 E-mail: info@ace-jps.com; gkenkn@gmail.com



サラワクによく見られ、“人を偲ぶ”とも言われる花

撮影者 中澤 健

最近、20年間乗ってきた車が走行50万*を超えた。ペナンでオートバイを受用していた当時、80代半ばの母が日本から来ることになり、まさかバイクで空港に迎えに行く訳にも行かず思案していた。その時、シンガポールへ移住するというペナンの中国系家族がまだ新しい中古車を格安で譲ってくれたのだった。ペナンからボルネオに移って13年、車体はかなり古ぼけてはいるが、ボルネオ島の大地で健在である。

すでに地球を10数周した計算になるこの車、その間には事故も故障もあった。命を落としても不思議でなかった転覆事故、若者の暴走車が横腹に突進したこともあった。結局誰一人傷つかずに走り抜いた50万*。マレーシア国産第一号のプロトシガガ。日本の三菱自動車の技術提携によるという。今ではボルネオでも綺麗な車ばかりになった。その中でやや恥ずかしいのか、真っ赤な私の愛車は堂々の走り続けている。

車検のないマレーシア。良い修理屋さんと出会えることが車維持の鍵である。ペナン、クチンでも恵まれたが、現生地シブでは最高のチームに巡り会えた。一寸異音が気になって持ち込むと、即座に問題を突き止める。技師のメカ主任と10人ほどのワーカーチームは見事だ。どのワーカーも愛おしげに古い車を扱う。車を介した人と人との出会いが嬉しい。彼らの技術と車。運転する私は、心して残りの時間お世話になろう。(健)

「星洲日報」記事より

Ling Lew Ching (林柳菁)
星洲日報 チーフ レポーター

翻訳 北田 駿志 (Melvin Lean Shun Ji) 高2
莉奈 (Amanda Lean Rina) 高1
(調整)北田 尚子

星洲日報

SIN CHU W DAILY



股親善所收養者

日夫婦内陸撤大要



星洲日報 -10月19日-1頁

~中澤 健氏:知的障害児者と共に歩んだマレーシアでの22年~

1. はじめに

中澤健氏は、1993年にマレーシアに来て今年で22年になる。そのうち、10年はペナンに。現在に至る12年はサラワクに住んでいる。

この2つの土地において、彼はACS(Asia Community Service)とRCS(Rajang central zone Community Service association)を立ち上げ障害をもつ人たちに関わり続けてきた。

1993年、公務員を辞めた彼は、最初にペナンに飛んだ。ペナン科学大学において、現地の障害者実態についての調査を行い1996年に日本の清水基金に報告書を提出。その後、1997年にペナンの人と共にACSを設立した。この組織は活発に活動を継続している。

昨年10月16日、シブでのイベントで知り合った“Sin Chew Daily”(星洲日報)記者のリンさんが「ムヒバ」を訪問した。灼熱の太陽の下、汗だくで熱心に隅々まで見て質問し、交流し、メモをとり、帰って行った。3日後の19日と翌日20日の2日に亘って2頁半を割いて「ムヒバ」記事が掲載された。中国語版で、十分に記事の意味が分からなかった。

その後11月、12月、それから訪問者が急増。メンバーと出会い、交流し、同時に多くのお米や雑穀やビスケットなどの食品を寄付して下さった。これほど人々の心を動かした記事の中身の全てを知りたいと思っていた時、ペナンの尚子さん(子どもたちとやります)と書いてくれた。“Dari Pinang”時代から「ペナン子育て日記」に登場した私たちの仲間。彼女の長男は現在日本で知事(佐賀大学)。多回翻訳は次男と長女のお二人。感慨深い。少し気恥ずかしいが、記者であるMs. Lingの熱意と、ペナンの初代アシスタントの尚子さん(家族)によって出来たこの頁をお楽しみ頂けたら嬉しい。(中澤 健) (記事も写真も、一部割愛しています。構成・文責 中澤和代)

和代夫人は、2000年にペナンに来て合流。その後ずっとマレーシア生活を継続。その後、二人は、2003年にサラワクの地を踏んだ。何故、サラワクだったか?については後で述べることにする。2年半の間、クチンで暮らしつつ、サラワク州の都市、及び地方の障害児者の状況を調査していた。2003年12月30日、クチンの住居としていた家主、ジョセフさんから、彼の故郷で行われる結婚式に招待された。この機会が後に現在の地域(カノウィット・バワン)に夫婦の住まい、及びデイセンターを作るきっかけとなったのである。

イバン族の結婚式は目を見張るものであり、イバンの人々の熱い思いに感動しながら、2004年の新年を迎えた。「みな、お酒を楽しみ、ほろ酔い気分になっていました。ロングハウスのマイケルさんは我々の訪問を歓迎してくれました」マイケルさんは「もし、あなたが首を縦にふるならば、あなたのためにここに家を建てられますよ」と言いました。「それはいいですね、お願いします」と私は答えたのです。2004年4月17日、住民たちは力を合わせて中澤氏の家を建て始め、中澤夫妻はこのロングハウスの住人となった。

2. 日本人夫婦の障害児への愛に国境なし。一組の日本人夫婦がサラワクの地で愛の種を植えた。見

返りを求めず、村落部のロングハウスの障害者を助け、彼らの暮らしに色合いと笑顔をもたらした。日本人夫婦である中澤健氏(74歳)と和代夫人(70歳)は、サラワクのこの地で12年間、黙々と福祉活動を続けてきたのである。

中澤氏は、2006年に団体登録・認可後、この地区(シブ市カノウィット・バワン)にデイセンターを設立したが、この夫婦のセンターの利用者への愛は無限である。彼らは、利用者のためのセンター建設が出来た後も、毎日の活動内容を注意深く計画し、自立すること、手工芸、運動などを教えつつ、皆に、彼らの居場所があることを示し、一人ひとりが自信をもてるように配慮した。夫婦の願いは利用者の心を動かし、彼らのエネルギーを前向きにし、希望をもたらした。

このつながりは、国籍、年齢、肌の色など関係なく、お互いに助け合い、一緒に過ごし、利用者の生活と命に重要な役割を果たしたのだ。

3. デイセンター(Mahhibah)設立の動機と各方面からの援助

13歳のフィロミナという少女がいた。彼女の状況は深刻だった。話すことはもちろん、身体の成長にも障害があった。危険回避のため、彼女はロングハウスの廊下につくられた木の櫃の中に終日いて

星州日報 -10月19日 -3頁

活動範囲は限られていた。中澤氏は、彼女の生涯がこのままであってはならないと思った。おそらく他のロングハウスにも似たような状況の子どもがいるのではないかと思い、デイセンター建設を考えることになった。(2009年5月13日、フィロミナは亡くなったが、センターに通い始めて、仲間を得た彼女の笑顔は、中澤夫妻やスタッフ、利用者の心の中に永遠に刻まれている。)

中澤氏はデイセンター建設の計画にあたり、土地の問題をロングハウスの家長に投げかけたところ家長の管理する土地を使うことに同意してくれた。そしてセンター構想は、2006年1月から土地造成、8月からは建物建設がはじまり、この地域の住民ボランティアと、年2回のペースで企画した日本からのワークキャンパーや、日本の新聞社の団体(読売光と愛の事業団)の海外ボランティアが力を合わせて建設に着手。地元の新聞報道で、それを知った中国系の有志から建築資材の提供を受けるなど両国の人々は、その後も国籍を超え、愛をもって、この事業に協力した。そして建物は2007年12月に完成した。

この場所を中澤氏はMuhhibahセンターと名付けた。“Muhhibah”とはハーモニーを意味しており、我々は一人一人個性があり、いろいろな顔や声からなる。だからこそ、たくさんの人々とともに新しい色彩や音を造り出していくことを願い、平和に向かう活動を広げたい。“Muhhibahセンター”は、約1エーカーの土地に一階建ての建物があり、広い活動空間、作業室2室の他、台所とオフィス、医務室がある。建物裏の丘の上には休憩小屋が作られ、周辺には鶏小屋、ミニゴルフ場、倉庫、発電機小屋(2014年5月まで、この地域には電気がきていなかった)、4つの池がある。全体の環境は、オープン後に5,6年かけて、ワークキャンパーと住民で作りに上げて来た。

2008年1月にデイセンターはオープン。2月には、州議会議員のYB Aaronや、門から建物までの道路の整備費、ヴァン、発電機などの費用を寄付(日本大使館・草の根資金協力)してくれたコタキナバル領事館の森田領事と岡田氏も参加して、地元住民の協力のもと盛大にソフトオープニングが行われた。(正式のオープニングは9月)



4. 利用者の状況

当初、5名だった利用者は、7年経った現在、23名になっている。利用者の年齢は18歳から49歳。1名がダウン症。5名が脳性麻痺。1名が自閉症。他は学習障害である。23名中、毎日通う利用者は20人。そのうち17人はカノウイトの近くに住んでいて、毎日、ドライバーが送迎をしているが、2人は遠く、専用の個人タクシーを使用、一人は両親がセンター近くの小学校勤務でシブジャヤという地区から送迎をしている。道路事情や家庭状況が悪くて毎日来れない人が3人いて、目下の課題である。

中澤氏によると、センターの設立はロングハウスの障害児者たちに学習と活動の場をもたらした。利用者のひとは、以前は話をせ

ず、笑わず、他人とのコミュニケーションはなかった。しばらく通ってきているうちに、話し始め、笑顔が見られるようになった。

5. Muhhibahセンターでの活動

センターは、月曜日から木曜日が朝8時半から3時半まで。金曜日は、8時半から11時半までである。

毎日、活動に入る前に全員で国家を斉唱し、利用者の愛国心を育てている。中澤氏によると、月曜日から木曜日は、学習、音楽、運動、絵画などの時間がある。また自己管理を学び、織物や手工芸を行い、お互いに助け合って過ごすことが日常の姿である。金曜日は環境整備の日と定め、センターやその周辺の大掃除や園芸を行う。

金曜日の午後は、スタッフ間で一週間の報告をしたり、翌週の計画や予定の確認を行い、7人のスタッフと中澤夫妻で、利用者について議論し、共通理解を深め、彼らの進歩をみている。このことは利用者が家庭やセンターで問題を抱えている場合、よりよく解決する手助けとなる。全ての利用者それぞれに進歩があると中澤氏は指摘する。利用者はセンターで一定期間を過ごすとは必ず、良い変化を見せてくれる。利用者の進歩は彼らの最大の満足なのだ。

彼らは、障害はあるが、学習能力があり、注意力や忍耐力によって、手工芸の才能を発揮する。一つ一つの糸が彼らの巧みな手により、色とりどりの布に織り上げられる。織物からは様々な製品が作られ、それらで売上収入を得ている。考えてみてほしい。彼らはペンも持たず、話もできなかったのだ。だが、今は玉葱や木の皮を染料にした環境に優しい天然染色と時には化学染料も使用し、ベナンのACSから送られた白糸を染める。日本製の織機と「さをり」の技術を取り入れ、機器を操作し、細心の注意を払って作品を生み出している。布製品を作ることは、利用者が好きな活動の一つである。利用者の一人、ナナは今年2月にセンターに入った。記者の訪問時、

星州日報 -10月20日-3頁

彼女がとても真剣にミシンを踏んでいるのを見た。彼女は去年、小学校を卒業後、本来ならば、中学校に進学するはずだったが、家の近くの中学には支援学級がなく、「彼女には行く学校がなかった」ナナの面倒をみていた祖父がセンターに来て面接を受けた。その時彼女は一言も発しなかった。が、今のナナはおしゃべりが止まらないようだ。

Muhhibahセンターは、利用者に希望と幸せをもたらし、逆に言えば、この利用者たちのおかげでセンターは笑いにあふれている。さらに全員で養魚、養鶏、野菜栽培をし、すべてが利用者の食事材料になる。

6. 製品の販売と毎年2回の買い物(利用者への還元)

製品の販売は、センターの財源を増やすためではなく、売り上げは全て利用者に還元されるので、製品づくりは、利用者の励みになっている。これら布製品は、この土地だけでなく、「国際的」な市場がある。中澤氏によると訪問客がこれらを買うだけでなく、彼が日本へ帰るたびに持ち帰り、日本でも売っている。

利用者は、センターの中で活動するだけでなく、外に出て社会にも入って行く。毎年、収穫祭とクリスマス前に街へ買い物にでかけるのだ。彼らは今や、自分の買い物計画を立て、品物を選び、自分の財布から支払うようになった。

7. Muhhibahの歌

彼らの状況は多くの人を感動させる。英語指導教員として、アメリカ人のジャレッドが近くの小学校に来ていた。Muhhibahを訪れた彼は彼らの前向きな姿に感動し、英語の歌をつくってくれた。利用者は音痴かも知れないし、音符が読めない。発音が不明瞭かも知れないが、自分たちの歌を楽しそうに歌う。私の訪問時もマラッカのギター伴奏で、手拍子をしながら

一生懸命歌ってくれた。短く簡単な歌詞で、センターの愉快な気分を引き出してくれる。皆の笑顔がはじけ、一緒にいるとストレスや悲しみを忘れさせてくれる。

8. クリニック

「Muhhibah」の近くには病院やクリニックがないので、センターに診療室をつくっている。当初、ここの診療室でライオンズクラブや医師ボランティアによる地域ぐるみの健康診断を実施したが今では州立病院の医師や看護師、OT、PTが定期的に来て、利用者の健康診断や、リハビリを行っている。また歯科衛生士もシブから来て歯磨き指導等をしてきている。

9. 運営および職員の状況

Muhhibahセンターは、政府だけでなく、この土地の有志、および日本のNPO(ACE)からの経済援助を受け成立した。2011年からはサラワク州政府の意向を受けCRセンターとなり、それ以降、福祉局とRCSが共同でセンターの活動を支えている。利用者の家庭の経済状況はよくなく、利用者から費用徴収はしていない。

職員は4人の支援員(ポーリン・マラッカ・ジェニー・ジョセフィン)がいて、ポーリンは現在、センターの主任。センター開始以来、彼女は利用者と共に成長してきた。彼女の夫であるマラッカはセンターのドライバー兼支援員、利用者の送迎の他、センターのメンテナンス、音楽、絵画などを担当している。他に調理員1人、警備員2人がいる。センターの職員は3つのロングハウスから来ている。彼らは英語で中澤氏と話をし、サラワクに来て十数年、夫妻は少しイバン語を話す。中澤氏は、奥さんの方が上手にイバン語を話すと笑いながら言う。

たくさんの貢献をしてきた中澤氏は私たちに訴える。言葉は障害ではない。国籍も言語も違うが優しい気持ちと行動力が問題を克服するのだと。

10. 70歳過ぎの高齢夫婦にとつ

てサラワクは我が家

中澤氏と和代夫人が海を越え、この土地にやってきたのは、中澤氏の父親が1942年からサラワクで仕事をしており(戦時下日本の軍需工場)、その後、現地召集され、1945年8月にこの地で戦死したからである。

サラワクにいる間、現地の人々と中澤氏の父親の関係は良好で、父親は常にサラワクの人々を賞賛していた。日本にいる妻に宛てた手紙には、サラワク州の人々は皆親切だと書いていた。「私は父がサラワクでとても良い時間を過ごし、そして、大戦により、最期をこの地で迎えたことを知っています。だから私はこの土地の人々、特に障害のために特別なニーズをもっている人たちに役立ちましたのです。それで、私は50歳で日本の公務員(厚生省障害福祉専門官)としての職を辞しマレーシアに来ました。」

利用者たちはセンターで、友と交わり、字を習い、日常生活に必要な学習をし、布を織り、自立生活や簡単な掃除ができる。彼らは心の門を開き、毎日の生活を充実させ、色彩豊かになっている。このような利用者の進歩を見て、中澤夫妻は喜んでいる。故郷は遠い日本だが、サラワクもまた我が家であると中澤氏は語った。



ACSはいま Sharneeya

Saturday Social Club 2015-



参加者との親密な関係を構築



公共バスに乗る



地元のレストランで食事

私たちは9月12日の土曜日、ソーシャル・クラブ・プログラムを試行しました。2015年10月10日と11月14日には9:00amから5:00pmまで実施しました。このプログラムは、ACSがこれまで実施してきたレスパイト・ケアを拡大したものです。

参加者は、特別なニーズをもつ15歳から25歳の若者にターゲット

を絞ったところ、7名が申込みました。各セッションには、最大5名の障害をもつ若者が参加し、5名～3名のスタッフやボランティアが同行しました。

プログラムの目的は、公共交通機関を利用することで、より良い自立生活のスキルを獲得し、特別なニーズを持つ若者の社会化を促進することです。

最初の外出はバスを利用して、ジョージタウンに行き、映画を見たり、食事をするのでした。

二度目は、ジョージタウンの美術館に行き、次はバターワースへのフェリーに乗ることなど話ながら三度目の外出を模索しました。これからどのように彼らが変わるか、私たちが何を学べるか、楽しみです。(翻訳：中澤和代)



RCSはいま 中澤 健

☆☆☆ 新メンバー紹介 ☆☆☆

今年3月に発行した「ACEだより」36号で予告しましたので、今年になってメンバーに加わった2人を紹介します。

新年早々の1月4日に仲間に加わったシェリン(Sherin Ak Robert)、13歳の女性。小学校は6年まで行き無事卒業したものの、中学に入れて貰えなかった。特殊学級のある遠くの中学に行くように言われたが、それは無理で諦めた。卒業後1年。何もすることがなく、気分がむらがあり、時には暴れたり引きこもったり。父親の仕事の都合で街で暮らしたりして「Muhibah」の存在を知ったのは昨年暮れ。即登録。仲間に加わった。

当初は物言わぬ少女だったが、3ヶ月半を経た今は別人のよう。聞けば先に入ったナナと小学校の同級生。しっかり活動にとけ込み

ナナはミシン掛けだが、シェリンは織物で自信を付けてきている。他のメンバーとも明るく接して問題はないが、ロングハウスでは未だに気分がむらがあり、家事の助け等はまだまだ出ていないようだ。焦らず、ゆっくり見ていくことが特に彼女には大事のようだ。

10日遅れて、仲間に加わったのは、グリー(Gary Ak Laurence)、19歳。彼は小中学校とも卒業。2年半前、在学中の彼は事故に遭い、左足は義足になった。卒業後は家において、「ムヒバ」のことは知っていたけれど自分の行くところではないと思っていた。しかし、彼は、ロングハウスで疑問何もすることがなく「ムヒバ」に来る決心をしたという。来てみて、本当に良かったと彼は述懐する。現在は明るく、元気よく、織物に取り組



シェリン 14歳



グリー 19歳

んでる。何より友だちが沢山出来た。彼は誰にも優しく、みんなからも好かれている。

シェリンとグリー、これからさらに良い日々が続きますように。

しゃらんじゃらん ちやり がわん♪(36回)

今年の干支はサル/ミューラーテナガザル

上杉 誠

2016年、今年の干支は(さる)です。熱帯の島ボルネオには実に様々なサルが棲んでいて、このコーナーでもオランウータンやテングザルなど、ボルネオならではの猿や東南アジア全般に生息するカニクイザルなどを紹介してきました。これらの猿たちは熱帯地方の様々な環境に適応する形で進化し、その暮らしぶりや姿形を変化させてきました。そんな猿たちの中でも、一般の観光で出会う機会は少なく、見る事が出来るとうれい種類の中にテナガザルの仲間が上げられます。

テナガザルの仲間は、その名の通り非常に手が長く、尻尾はほとんどなくなっているのが特徴です。彼らは奥深いジャングルの時には60mを超える樹冠(森林の上部)で暮らすことを選択した生き物で、地上に降りることはほとんどありません。そのため、木々の間を素

早く動き回れるように手が長くなり、振り子のように体を動かしながら移動していくのです。

そんな彼らはジャングルの朝を告げる歌い手でもあります。ボルネオに私曉が訪れる頃、目覚めた彼らは「ウワウウ〜ワッ、ウワウワウワ」と言う感じの鳴き声を盛んに交し合い、お互いを呼び合います。もしかしたら、その日一日の予定を確認しあっているのかもしれないですね。

ジャングル奥地のリゾートなどでは、このテナガザルたちの鳴き声が心地良いモーニングコールになってくれます。夜明け時、まどろみの中で聞く様々な音に囲まれて、どんな生き物が近くにいるのか、想像をめぐらすのもボルネオボルネオでの楽しみの一つです。

ボルネオには現在4種類のテナガザルが生息するとされていますが、テナガザルの仲間の中でもサ

ラクで比較的出会いやすいのは、ミューラーテナガザルです。割合小型の濃い灰色をした



ミューラーテナガザル

テナガザルの仲間ですが、ボルネオの固有種で国立公園などジャングルトレイルで見かける機会があります。顔の周囲が白っぽく縁取られ、つぶらな瞳がかわいい猿です。猿は「去る」に通ずることから難が去る吉兆の徴とされるそうです。最近何かと物騒な世の中ですが、申年の今年は難の少ない年になってほしいものです。

jalan jalan cari kawan はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

お知らせ

ACE事務局移転

ACEの事務局は、今年4月1日から下記に移転しましたので、お知らせします。
〒859 - 1215
長崎県雲仙市瑞穂町古部甲1572番地
社会福祉法人 南高愛隣会 内です。
Tel 0957-77-3600, Fax 0957-77-3966です。
ホームページ、e-mail のアドレス、ACE会費等納入のための郵便振替口座番号は従来通りですので、宜しくお願い致します。



ACE総会のご案内

日時 6月11日(土) 13:30 ~ 19:00
場所 TKP市ヶ谷カンファレンスセンター
JR「市ヶ谷駅」から徒歩3分
(TKP市ヶ谷ビル 03-5227-6911)
参加費 2,500円(会員、非会員共)
議事、現地報告他、講演、懇親会があります。
今回ご講演いただくのは、村木厚子さんです。
演題は、「〜あきらめない〜」
お申し込みは左記の事務局又は e-mail で。
参加費は会場で徴収させていただきます。

編集後記

・今号は、思いがけず、地元新聞に掲載された記事を許可を得て転載することになりました。つまり第3者から見えるムヒバの様子です。当初は、漢字の拾い読みですませたのですが、新聞を見たとき次に訪れるグループがあまりにも多いので、どういふ風に書かれているのかと気になったこと。また、記事の書き手がムヒバを受してくれてことに気づいたからです。北田さんのご好意で翻訳がかない、みな様と記事を共有できたことを幸せに思います。(Kazuyo)

・ACEは今後の発展に向けた大きな区切りの時を迎えています。そんな思いも込めて、今回は特別の紙面構成になりました。サラワクの新聞記事の翻訳のまとめを受け持ってくれた北田尚子さん。1994年、ベナン島から半島側に渡り、少し南下したニポントバルにベンケル・ハラバン(希望作業所)を開設できたのは彼女のお陰です。ベナンにACSが出来る前です。今回、彼女と彼女の子らでボルネオの活動の記事の翻訳をもらったことに運命の不思議を感じています。(Ken)